

社会不安障害の記憶構造に関する検討

佐々木 晶 子

広島大学大学院総合科学研究科

The memory structure of social anxiety disorder

Shoko SASAKI

Graduate school of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract: Several theorists have argued that a pathological fear structure, formed on the basis of past experience, is a core factor in maintenance and treatment of the social anxiety. Although, fear structure is considered to be implicit associations which are out of awareness, examinations of the fear structure of social anxiety disorder have relied mainly on self-report measures. Therefore, this study investigated implicit associations in the fear structure of social anxiety disorder and examined the influences of implicit and explicit associations on maintenance and emotional processing of the social anxiety. We hypothesized that a high social anxiety group would show stronger implicit associations than a low social anxiety group. Also, the implicit association was assumed to uniquely predict to automatically initiated and involuntary symptoms, whereas the explicit association was assumed to uniquely predict to reflective and voluntary symptoms. With respect to the emotional processing of social anxiety, we hypothesized that implicit and explicit association changed independently. Results of this study supported the above hypotheses. Consequently, we proposed the maintenance and emotional processing model of social anxiety disorder. This model demonstrates

that the implicit and explicit associations specifically function on both maintenance and emotional processing of social anxiety.

第1章 社会不安障害の記憶構造に関する研究動向と本研究の目的

社会不安障害（以下, SAD）の認知モデル(Clark & Wells, 1995)や情動処理理論(Foa & Kozak, 1985, 1986), 不安のスキーマモデル(e.g., Beck et al., 1976)では, 記憶構造がSADの維持や情動処理の要因となることが指摘されてきた. 記憶構造は潜在性によって区分されると想定されてきたが, 先行研究では質問紙を用いた検討が中心であり, 心理学的手法を用いて記憶構造の潜在的側面を客観的に測定した検討はなされてこなかった. さらに, 記憶構造がどのようなメカニズムでSADの維持や情動処理に影響を及ぼすかについては想定していないという問題があった.

第1章では, 記憶構造の潜在的連合を, 意識されず, 意図的に歪めることができない, 自動的に活性化される記憶, 顕在的連合を, 意識され, 意図的に歪めて報告することが可能で, 活性化に処理資源を必要とする記憶と定義し, 両者に関連性は認められるが, 症状に異なる影響を及ぼすことを想定する維持モデルを提案した. さらに, 情動

処理過程において、記憶構造と矛盾する情報の入手によって記憶構造の変容が促進されるが、潜在的連合と顕在的連合の変容時期にはズレがあると想定する情動処理モデルを提案し、これまで予測が困難であった症状や情動処理過程についても、潜在的連合の機能を想定することで説明可能であることを示した。

第2章 社会不安の記憶構造の構成

SADの潜在的連合の構成要素を、Implicit Association Test (IAT; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) を用いて検討した。その結果、社会不安の高い者は社会不安の低い者よりも、“不安反応”と“否定的評価”の潜在的連合が強固に形成されていることを示した。また、潜在的連合は、顕在的連合を測定する質問紙尺度と関連は認められるものの、関連の程度は弱いことを示した。よって、SADの潜在的連合の存在が実証されたとともに、潜在的連合と顕在的連合の間に関連はあるものの、各連合が完全には一致せず、独自の機能を持っている可能性が示唆された。

第3章 社会不安の記憶構造が不安反応および認知の歪みに及ぼす影響

潜在的連合と顕在的連合が不安反応や認知の歪みに異なる影響力を持つかどうかを検討した。研究2-1では、不安反応として、不安の認知的側面、行動的側面、生理的側面を測定し、認知の歪みとして不安反応に対する認知の歪みを評価した上で、パス解析を実施した。その結果、潜在的連合は不安の行動的側面に影響し、顕在的連合は不安の認知的側面と認知の歪みを含み認知的症状に影響することを示した。一方、記憶構造と生理的反応の関連は認められなかった。この原因として、生理的反応に含まれる課題に対する努力の成分の影響によって、両者の関連が相殺された可能性が考えられた。そこで、研究2-2では、社会不安の高い者を対象とし、記憶構造と生理的反応の関連を検討した。その結果、社会不安の高い者のう

ち、潜在的連合が強固に形成されているタイプは潜在的連合の強度が弱いタイプよりも生理的覚醒を示し、不安の認知的側面には有意な差が認められなかった。以上より、潜在的連合は不安の行動的側面と生理的側面に影響する一方で、顕在的連合は認知的症状に影響することが明らかとなった。

第4章 社会不安の記憶構造が注意の歪みに及ぼす影響

潜在的連合と顕在的連合が、認知情報処理過程の歪みの1つである外的社会的脅威情報に対する注意バイアスに及ぼす影響を検討した。dot-probe課題の刺激の呈示時間によって、不随意的な注意バイアス(200ms呈示条件)と随意的な注意バイアス(500ms呈示条件)を測定する2条件を設定し、検討を行った。その結果、200ms呈示条件と500ms呈示条件における注意バイアス得点には負の関連があったにも関わらず、200ms呈示条件における注意バイアスは潜在的連合によって予測され、500ms呈示条件における注意バイアスは顕在的連合によって予測されることが示された。したがって、潜在的連合は外的社会的脅威情報に対する不随意的な注意の接近に影響し、顕在的連合は外的社会的脅威情報からの随意的な注意の回避を予測することが示されたといえる。

第5章 社会不安の記憶構造と情動処理

介入によって、顕在的連合が潜在的連合に先行して変容するかどうかを検証するために、介入前後の各連合の変化を評価し、変化の関係性を検討した。加えて、記憶構造と矛盾する情報の入手を促進すると予想される認知療法プログラムと従来のエクスポージャープログラムを実施し、矛盾情報の入手が記憶構造の変容に促進的に影響するかどうかを検討した。その結果、認知療法を実施した条件はエクスポージャーを実施した条件よりも矛盾情報が多く入手された可能性は示されたが、記憶構造の変容の程度に有意差は認められなかつ

た。両条件とも、顕在的連合は変容したが、尺度得点は依然高かった。また、潜在的連合には有意な変化が認められず、顕在的連合と潜在的連合の変化量の間には明確な関連が認められなかった。以上の結果は、情動処理過程の途中段階を示すものであり、潜在的連合は顕在的連合と同時に変化せず、遅れて変化する可能性を示唆するものであるといえる。

第6章 総合考察

第2章から第5章までの一連の検討を通して得られた結果を総括し、SADの維持・情動処理モデルの妥当性と臨床への応用可能性について考察した。本研究の結果から、潜在的連合がSAD症状の自動的・不随意的症状を予測し、顕在的連合が統

制的・随意的症状と関連することが示されたことから、潜在的連合と顕在的連合が異なるメカニズムでSADの維持に影響すると想定するモデルの妥当性が示された。また、潜在的連合と顕在的連合は同時に変化せず、潜在的連合は顕在的連合の変容に遅れて生じる可能性が示唆された。したがって、顕在的連合と潜在的連合の変容時期のズレを想定することでSADの情動処理過程の説明を試みたSADの情動処理モデルの有用性が示されたと考えられる。さらに、本研究の結果より、潜在的連合を評価することで、症状や治療効果のアセスメントをより正確に行うことが可能となり、効果的な介入アプローチの選択や再発リスクの低減にもつながると考えられることから、臨床への応用の可能性が示された。

引用文献

- Beck, A. T. (1976). *Cognitive therapy and the emotional disorders*. New York: International Universities Press.
- Clark, D. M., & Wells, A. (1995). A cognitive model of social phobia. In R. G. Heimberg, M. R. Liebowitz, D. A. Hope, & F. R. Schneier (Eds.), *Social phobia: Diagnosis, assessment, and treatment*. New York: Guilford Press, pp.69-93.
- Foa, E. B., & Kozak, M. J. (1985). Treatment of anxiety disorders: Implications for psychopathology. In A. H. Tuma, & J. D. Maser (Eds.), *Anxiety and the anxiety disorders*. Hillsdale, NJ: Erlbaum, pp.421-452.
- Foa, E. B., & Kozak, M. J. (1986). Emotional processing of fear: Exposure to corrective information. *Psychological Bulletin*, **99**, 20-35.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.